

ショーペンハウエルの女性論（中）

石 塚 勝 雄

五

本節で彼は先ず、女性の^{フェルメント}理性は狭隘であると断定し、次にその事から帰結する女性の種々の特性を論じている。我々が現代の女性を眺めても、大体に於てこの事は承認しない訳にはゆかないであろう。古くは、「女の猿智慧」と云われ、現代でも、「女は視野が狭い」が、殆んど通り言葉になつてゐる。然し乍ら、その根拠に就ては、彼に従えば次の如くである。

『すべて事物は、それが高級且完全であればあるほど、成熟に達するのが、遅々たるものである。男子は二十八才以前には、その理性と精神能力との成熟に達することは、殆んどあり得ないが、女子は十八才を以て成熟する。然し乍らこれに相当して、女子の理性なるものは、頗る狭隘なるを免れない。』

即ち一言で云えば、「女の早熟」がその根拠となつてゐる。これは巷間でも、「女の子はま^ませてゐる」と云われ、女の早熟は、この方面の学者間に於ても、広く承認されてゐる事実である。のみならず、これは法律婚の年齢制限に採用され、既に社会制度化されてゐる。^{（註一）}斯くして問題は、早熟と理性の狭隘——広く云つて劣性——との間に果して必然関係ありや否やである。

先ずショーペンハウエルの様に、この必然関係を肯定する思想、言わば「短期間に出来上つたものに^く確なものがない

い」と言う考え方が支配的と見てよいであろう。筆者の脳裡に浮び上つただけでも相当にある。その最も典型的なものとして、西洋では、「羅馬は一日にして成らず」、東洋では、「大器晩成」・「拙速巧遅」、日本では、「晩秋の白菊」とでも云い得ようか。更に「のろくとも、ぢつくり」と云う風な教訓的色彩の濃いものに至つては、東西数限りないと云つてよいであろう。

然し乍ら、反対の事例・思想もある。天才は早熟であると、よく言われる。ショーペンハウエルの思想・宇宙観自体が、その青年の日のヴィジョンに浮び上つたものであると言われる。又メナンドロスの周知の言「神々がいとしみ賜う人はみな、若くして死ぬ」は、その宗教的意味は別として、この様に天的に恵まれた人達の早期の完成をも意味内容として有つと云つて差支あるまい。

更に女の早熟を肉体・精神の両方面に分けて考えてみるに、先ず前者に就ては次の如き見解が広く行われている。即ち、妊娠・分娩・授乳・育児等の一聯の現象には莫大の生理的エネルギーを必要とするものであり、何時何時その起点である妊娠が惹き起されても、後続の諸現象に支障を来さない様に、自然は早めにエネルギーの本源の蓄積を急ぐのであると。次に精神能力に就ても、女子は決して十八才を以て成熟するのではなく、この頃から結婚を志向せしめられる社会環境の結果、その様に見えるだけの事で、決して両性の先天的な差を示すものではないと云うモンタギュウの見解がある。即ち彼は云う、「……女子が結婚のことを真剣に考え始め、一方男子が暮しを立てるという条件で考え始めるのがこの段階（十八才頃―筆者註）なのである。（中略）これは、しばしば云われるように、女性が十八才で精神的成長を止め、一方男性はその成長を続けるとか、またこの相違が両性間の先天的差に原因するとかいうことを意味したりはしないであろう。むしろ、これは、男性が知能検査の測定する経験、知識を得つづけるのに、女性は、検査が測定しないもつと家庭的な関心事に心を向けてしまうことを意味するのである。」と。（註二）

斯く觀じ来る時、現在の女子が現在の男子よりも「理性が狭隘である」と云う事實は、概括的に云つて一応肯定され

るとしても、その根拠を早熟に歸して簡単に割切つてしまふ判断は、面白く読ませる隨筆的価値は別として、學問的な普遍妥当性を要求する事は出来ないと思わなければならない。惟うに、これは自然と社会とが入り乱れ、かみ合わされた複雑微妙な領域なのであつて、「拙速」という風な単一の原理で把握することを許さないのではあるまいか。

次にその「視野が狭い」ことから歸結する女性の一聯の特性を挙げてゐるが、先ずその第一段に於て、彼は次の様に説くのである。

『この故に婦人は、その一生を通じて子供であり、常に一番近いものばかりを見、現在に執着し、事物の外観をその真相と考え、最も重大な事件よりも、瑣末な事柄を好むのである。(中略)寧ろ婦人は精神的近眼者である。というのは、その直感的理解力は、近いところを鋭く見るけれど、その狭隘な視野のうちには、遠距離のものが入つて来ないからである。(中略)男子にもあるが、然し婦人に於てずつと、屢々發見せられる——往々にして狂氣に近い——濫費癖は、實際この理由から生ずるのであつて、彼等は心の中に惟えらく、金銭を儲けるのは男子の職分であり、これを出来得るなら夫の存命中に、或は少くとも夫の死後に於て蕩尽するのが、自分達の役目である。(後略)』(註三)

先ず女が男よりも子供に近い事に就ては、既に本論第三節に於て述べられたのであるが、ここでは根拠を附して繰り返し論ぜられている。而かも兩者何れの場合に於ても、これが蔑視に値するマイナスなものとされている事は明かである。以下果してそれが妥当であるかを考察して見よう。

天才は早熟である、女も早熟である、子供は早期の人間である。天才は何時までも子供らしい、女も子供らしい。又天才は直観に秀れている。女も然りである。(前掲引用文中にある如くジョーペンハウエルも亦直感的理解力として之を認めている。)子供も亦「負うた子に教へられ」の俚諺も示す如く、特有の直感の力を有つている。斯く考えて来ると、天才・女・子供の間には、何等かの共通点があると見なければならぬ。而かもこの云わば最大公約数は、素朴な、世俗に汚されない、何か貴重なものと思つて差支ないのではあるまいか。更に人類学的解釈によれば、人間が

猿に似ているのは子猿に似ているのであつて、おとなの猿に似ているのではない。幼児型は進化の型を指向すると云う学説がある。モンタギューは、この事に就て次の如く結論している、「人間の進歩が方向づけられているタイプとしての人間の幼児には、男性よりも女性の方がずつと近づいているのである。」(註五)

斯く觀じ来る時、女が子供に近いと云うことは、之に對する価値判断の基準如何によつては、望ましい面も多々あり得ると云つて差支あるまい。成程、現在の女は視野が狭いとしても、その面だけをとらえて蔑視に値するものと見るのは、或る個人の一面のみをとらえて全人格的に非難する遣り口と同工異曲であると云わねばならない。

次は女の （ヘンダール・フェルシュエン） 濫費癖である。この点に就て筆者は、西洋婦人の実状に暗いのであるが、日本に於ては少くとも世帯持ちの婦人一般は、むしろ反對につつましいと見るものである。(註六)

更に云うならば、女は男よりも本質的に濫費癖が強い、と云う命題の成立自体を疑うものである。成る程彼の説く如く、女の濫費癖は視野が現在に限局されている所から来る、と理屈は立派に附く。併し濫費癖と云う風な社会制度との緊密な關聯に於て初めて形成される性質を、男であれ女であれ、何れか一方の本性であるかの如く説く事自体が方法的に誤であると思う。女の濫費癖に就ての、我々から見ると言い過ぎと思われる此の辺の彼の筆致は、彼と極端に不和の仲だつた彼の母が亡夫の莫大な遺産を蕩尽する姿が目先にちらついて、つい筆が走り過ぎたものと解さるべきであらう。

次は其の同じ「視野が狭い」ことから歸結する女性の長所であるが、彼は次の如く云う。

『……然しまた次の如き長所もある。それは、婦人がわれらよりも、より深く現在に没頭し、従つて苟も忍び得らるるものである限り、現在をわれらよりも、よりよく享樂すると云う長所であつて、この事から、婦人は心勞せる夫を休めるために、――必要な場合には、またこれを慰藉するがために、婦人に独特なる快活さが生ずるのである』

この女性の長所の發見指摘は彼を俟たずとも、周知の伊太利の諺「女は即席、男は熟考」(Woman impromptu, man on reflection.)(註七)の方が、より端的に、より包括的に事の真理性を我々に示して呉れるのである。併し両者は其の

根拠を異にする。諺の方は形而上的であり、彼の方は、女の視野が現在に限局される事から来る、云わば「盲蛇に怖ぢず」式の快活なのである。筆者によれば、「即席的」とは、有名な「楽しい人生は決して考えると云う事の中にはない」と表裏一体（前者は積極面、後者は消極面）を為す同一思想であつて、これは思想と云うよりはむしろ天性的なものとなつて、女性に内在すると見度い。従つて観方に於ては、諺の方に組し、ショーペンハウエルを避け度い。

次の段に於ては、前段末尾の敘述が更に滑らかに尾を引いて、その云わば「即席的把握法」とそこから生ずる女性獨特の快活さを利用する人生智を教えて彼は次の如く云う。

『古えのゲルマン人の風にならつて、困難なる事件に當つては、婦人にも相談するのは、決して非難すべき事ではない。何となれば、婦人の事物理解法は、男子のそれとは全然別であつて、殊に彼等が目的への最捷徑路を行くを好み、一般に最も近いところに存する事物を眼中に置く点に於て、われらとは異なるからである。われらは最も近いところに存する事物を、それがわれらの眼前に存することによつて、大抵は觸過し去るもので、かかる折には再び手近な・そして簡単な考え方を得るために、眼前に存在するものへと連れ歸られる必要がある。更にこれには、次の事が加わる。婦人は断然われらより、より、冷靜であり、従つて事物に就ても、事實存在する以上に、多くのものは見ないのであるが、男子は、その激情が動かされると、ややもすれば存在するものを拡大し、或は想像的のものを附加するというのがそれである』

所説明瞭で、つまり、「男が、その視野の広い理性を以て将来を案じ、凡ゆる観点から事物を考察してみたところで、所詮人間理性の限界にぶつかつてしまひ、局面好転の糸口を見出すと云う保証は何処にも与えられはしないのだ。先ずそのむずかしい顔を止めて、取り敢えず女房の即席の手料理でお茶にでもする方がむしろ賢いのだ」

（註八）

とても

云つた調子。この辺は、彼の論文の音楽的構成から云えば、蔑視の主題の間に織り込まれた讚美の間奏曲であり、哲人の労作の進行から云えば、ここで一服して筆の疲れを休める所である。更に注意を要することは、ショーペンハウエル

には妻もなければ女もない。その彼が、こうしたゲルマン人の高き人^{レインシュアイズ}生智^{サハイス}を説いていることは、自分の身をすっかり忘れて完全に客観世界に没入している事を示すものであり、視角を換えて云えば、彼の学問が芸術の役割を演じている実証なのである。更に云うならば我々は、その曇なき客観的態度、自己憐憫の情の微塵だに無き哲人^(註九)のスケールの雄大さに想を馳せるべきであらう。

次の段に於て彼は、女性の道徳性を論じ、憐憫とか同情とか道徳の基礎的方面は男子以上に示すけれども、道徳の社会的方面とも云うべき正義・正直等に於ては、男子に劣るとし、その根柢をば前と同一の源泉即ち理性の薄弱に歸して次の如く云う。

『婦人が男子よりも、より多く憐憫を有し、従つてより多くの仁愛と、不幸な人々に対する同情とを示すけれども、正義・正直・誠実等に於ては男子に劣る事も、同一の源泉から導き出される。何となれば婦人の理性が弱い結果、現在のもの、具体的なもの、直接に現実的なものが、その力を彼等の上に行使して、この力に対しては、抽象的思想や、恒定的原則や、堅い決心や、一般に過去・未来或は目前に存在せざるもの・遠隔なるものに対する顧慮は、殆ど多くなすところがないのである。されば彼等は、徳そのものに対する第一次的の主要な性質は成程持つてはいるが、これを展開せしむるに往々必須の器械たる第二次的の性質を缺如する。(後略)』

先ず念頭に入れておくべき事は、ショーペンハウエルの倫理観一般についてである。彼は周知の如く、道徳の基礎を「同情による人類愛」においた。右の引用文中「同情」と訳された語(die Teilnahme)は「関心」の意であつて、彼が道徳の基礎とした「同情」とは、右の引用文中「憐憫」と訳された語(Mitleid)なのである。即ち、共に(mit)悩む(Leiden)の意である。ショーペンハウエルの人生観の悩みは、自分の個人的悩みを悩む悩みではなく、人の悩みを共に悩む悩みであつたのである。共に悩むとは自他を同一視することであり、これのみが眞の純粹な愛であるとした。これが、即ち道徳の根源が、女性には男性以上に備わつていてと見たことは、女性蔑視論者と云われ

る彼の主張として、又後述の女性の道徳性を論じた思想家達との比較に於て、先ず注目されなければならない。

女性に於ける道徳性の稀薄乃至欠如と云う観方は――其の論述のニューアンス、其の根拠附け等に於ては種々様々であるが――ショーペンハウエルを俟たずして、広く行われている見解と云わねばなるまい。

先ず周知の如く、英語の「徳」(Virtue)が語源的には、ラテン語の「男の秀性」(Virtus)から来ている。これは男女両性の中、男の特性に着目しての表現であるから、反面の解釈として女性の無道徳性を示唆している訳である。又邦語の「男氣をきを出して」も「男の特性たる社会正義心を振り起して」位の意味に用いられていると解して差支あるまい。次に諸学者の見解を観るに、シンメルも亦同様に、女性に於ける正義感の欠如を述べて次の如く云う。即ち「私はかつて男の及ばないほどの倫理的高みに達している婦人を幾人か知っていた。しかし、特殊な徳目としての正義というものを彼女たちは所有していなかった。男にあつては、他の道徳的諸性質が往々噂のまこととなるような人でも、正義という徳はしばしば現れる。」^(註十)更に、近代フエミニズムを社会科学的に初めて体系附けたと云われるジョン・スチュアート・ミルにも同様の主張がある。即ち「このような人格の面から見れば、女性は男性よりも高い水準に立っているが、然し、正義の素質という面から見れば、女性の方が少し低い。」^(註十一)又別の方面では、徹底的女性蔑視論者であり、人生哲學的婦人解放論を唱えたヴァイニングルは、女は不道徳ではなく無道徳であるとし、女性に於ける道徳性の先天的欠如を説いている。即ち「私は殊更に女が邪惡であり、反道徳的であると論ずるのではない。寧ろ彼女は真に悪人たることは出来ない」と云うことを主張するのである。彼女はは単に無道徳なのである。」^(註十二)更に、ショーペンハウエルによつて道徳の基礎であるとされ、又それが男子以上に示されるとされた女性の同情心なども、ヴァイニングルによれば次の如く解されている。即ち「女は泣く人々とともに泣き、笑う人々と共に笑う――従つて女性の同情の大部分は間に合せものである。」^(註十三)又、女の同情心を立証するものとしてよく云われる看護婦の同情心なども彼の手にかければ次の如く片附けられて了う。即ち「男は病者の苦悩を恐らく正視することは出来ないであろう。……看護婦を見る者は、誰しも彼女等が最

も怖ろしい死の苦悶を前にしながら平静を保ち、溫和であることに驚嘆を感じるに違いない。」^(註十四) 併し彼と雖も、女が道

徳性を獲得する場合のあることを認め、その方法的論理構造を次の如く述べている。「……彼女は投射される価値の容器として役立つのである。彼女は善でも悪でもない故、彼女の人格の上に課せられたこの理想の負担を阻みもしなければ怒りもしない。女の道徳性が獲得されることは極めて明白であるが、しかしこの道徳性は至上の愛と献身との発作に於て彼が彼女に贈つた処の男のそれである。」^(註十五)

以上は女性に於ける道徳性如何の問題であるが故に事重大であり、又この問題に対するジョーペンハウエル^(註十六)の地位を明かにする為に、彼以外のこの問題に対する観方をも簡単に述べて来た次第である。最初に述べた語源とか言草とかを援用して断定を下す立場は、習俗に基礎を置く立場と云い得るであらうし、その限りに於て妥当性を有つものと云つて差支あるまい。即ちこの立場は、少くとも云わば蓋然的真理・直観的真理・体験的真理を伝えていると見て差支ないのではなからうか。次に諸学者の立場を概観するに、ジョーペンハウエルを含めてそれに共通な点は、女性の道徳性に就て全面的否定ではないにしても、何れも消極的なことである。而して此等は更に大体二派に分れて、女性に於ける先天的道徳性の存在を認めるが、之を体系附けて道徳にまで完成する素質を欠くとするもの(ジョーペンハウエル・ジンメル・ミル)と、単に男性に存在する道徳の容器(表象)としてふさわしい屬性を女性に認めるもの(ヴァイニングル・聖書)となると思う。次に前者に屬するジョーペンハウエルとジンメルの両哲学者を比較するに、已述の如くジョーペンハウエルに於ては、体系化する(道徳とは通常体系的なものとされる)能力を欠くのは、女性に於ける理性の薄弱に基くものとする。ジンメル^(註十六)の場合は前掲引用箇所の前後を要約すれば大体次の如くなるであらう。「男性に於ては、自然の衝動と道徳的命令、存在と当為、論理と倫理、と云う風な二元論の上に立つて、その克服とか統一とかを指向する過程を辿る。女性に於ては、此等両者が分離せずに或いは分離を必要としない程、自然に内的統一を保っているのでは

る。^(註十七) その典型が所謂美しき魂 (die schöne Seele) なのである。女性に於ける正義感の欠如などと云われるのも、論

理的要素が優越している男性的正義感の立場から見ると其の様に云われるので、女性に於ては、正義も純粹に倫理的な行き方をとつてゐるのである。^(註十八) 斯くしてショーペンハウエルの問題に対する観方は、決して珍稀なものではな

く極めてありふれたものであり、論理的に筋も通つてゐるのであるが、シンメルから見れば、男性的二元論の立場からの観方に過ぎないことになる。^(註十九) 併し観点を更に拡大するならば、ショーペンハウエルは普遍的理性の立場であり、シ

ンメルは人生哲学の立場であり、それぞれの立場に於て真理を伝へてゐるとも云えようが、併し結局のところ両者は同工異曲と云つて差支ないのではあるまいか。

次に、前項に述べた女性に於ける正義の欠如は即ち「不正^{ウツジヒチライ}」となり、これを更に助長するものとして女性の虚偽^{ウソ}を巧みとする天性を挙げ、之を彼は次の如く痛論する。

『この故に婦人の性格の根本的欠陥として、「不正」ということが發見される。この欠陥は、まず理性と熟慮とに於ける上掲の欠乏から生れるのであるが、その上なお、彼等がより弱きものとして、「力」ではなくして「狡計」を頼みとするように、自然から定められてゐることによつて助長される。彼等が本能的な狡猾さを有し、虚言に對する亡ぼしがたき性癖を持つは、この理による。蓋し自然は、獅子に爪と齒とを、象と猪とに牙^{きば}を、牛に角を、鳥賊^{いか}には水を濁らす墨汁を与へたように、婦人に對しては、その自己防衛の爲めに、「偽^{いつわ}る力」を賦与して以て、これを武装した。即ち自然は、男性に体力及び理性として与へたすべての力を、女性にはかかる天賦の形でもつて授与したのである。(後略)』

先ず云わば「女はうそが上手だ」は果して事實であるかを見るに、これまでの女を男との比較に於て見れば、そう云われても致し方がないようである。従来は、正直・純潔・一点張りの「竹を割つたような」性格が男らしいものとして賞揚され、之に反して、女はねちねちした、陰險なもの、魔物、「十人の男子七人の子女をもつとも女に心ゆるすな」、

「女に白い歯は見せられぬ」とされた。然し婦人解放の終戦後の日本では、婦人はその明朗性を取り戻したと云う声を屢々耳にする。確かにその傾向は観取されるが、併し近來益々その勢を逞うしているかに見える婦人のお化粧なるものは、一種の「お化粧」^ば即ち虚偽であり、婦人に強いとされる虚栄心も亦一種の虚偽である。恐らくショーペンハウエル²の生きた約一世紀前の西欧の婦人もこのような存在であつたのであろう。前掲ヴァイニングル（一八八〇—一九〇三）も亦その著『性と性格』の随所で、女の不真実、虚偽を痛罵しているが、その一箇所を摘記してみよう。即ち「女は不真実である。彼女は動物と等しく殆ど形而上的実在を持たない。しかし動物は言語を持たない故、嘘をつく事は出来ない。真理を語るためには、人は、或るものでなければならぬ。真理は存在に依拠する。……男は常に真理を欲求する。即ち彼は常に或るものであらんことを欲する。認識本能は究極に於て不滅の欲求に一致する。それを実感することなしに一つの説に反対する者、内心では否認しながら表面的は認を与える者、かかる人々は女の如く何等の眞の存在も持たず、そして必要に応じて嘘をつかねばならない。それ故女は、たとい客觀的に眞實を語っている場合でも、常に嘘をついているのである。」^{（註二）}要之、虚偽とは正義・正直・眞實の對極又は欠如であり、従つて女性の虚偽は女性の本性であるかの問題は、論理的には前項の論議と全く同じである。唯歴史的に見るとき、女は虚偽的性向が男より強かつた事實は否定出来ないようである。

次にショーペンハウエルによれば、女の虚偽は自然が「弱者」に与えた武器であると云う。ここで問題は「弱者」に在る。「ハムレット」の中の有名な台詞によつて、広く知られる「弱き者」(Frailty, das schwache Geschlecht)とは果して女性の本質なのであろうか。そのようにショーペンハウエルが解していることは、「自然」^{ナチャー}と云う用語から明らかである。然し之れに対する社会学者の觀方は、女性の劣弱は凡て社会的・歴史的なものとする立場と、その中身体・体力の劣弱に限り本質的なものとする立場に分れる様である。又女性中心説によれば、男性開花^{（註二十一）}による男の凡ての方面の異常なる進化・發達が、男との比較に於て女を劣弱に見えさせていることになる。斯くして一般的に云つて、女

を弱者とすることには、何人も異存はないとしても、それは飽迄云わば社会的弱者であるとする観方が支配的であると云わねばならない。次に武器と解すこと、又は武器として發達したと観る事には反対はないであろう。何となれば、社会の被抑圧層・弱者であつた婦人が、自己の社会的生存を維持するが為には、虚々実々の術策(世十二)にうつつたえる事が必然の要請であつたと考える事は極めて自然であるからである。平易に端的に云えば、「馬鹿正直では世の中は渡れない」と云う世俗主義的虚世観と理論は全く同じである。唯「烏賊いかの墨汁」と違ふ点は、彼が天性であるに反し、是れは後天的性格だと云うことである。斯くして、「弱者」・「虚偽」・「武器」等の一聯の課題は、社会科学の領域に属し、之を彼の如く形而上学的立場から考察するのは、いささか当を失していると云わなければならない。

(註一) 日本民法は、その第七百三十一条に於て、婚姻の最低年齢を男満十八歳・女満十六歳と規定している。(旧民法のそれよりも男女共それぞれ一年上げられている。)法律上の男女の平等が実現された今日でも男女間に差があるのは、心身共に女の方が成熟が早いと云う事実に立脚しているからである。従つてこれは法律上の不平等とは云えない。

(註二) A. Montagu, *The Natural Superiority of Women*, 1953, p. 122. 田中訳「女性——この優れたもの」法政大学出版局、昭和二十九年、一七〇頁。

尚これに関して、女子高等教育に於ける筆者の短き教師生活の体験を記すことを赦されるならば、男子の所謂秀才も及ばない程の秀れた学力を示した女子学生(少数ではあるが)に接したし、又低学年に充分の素質を示したが高学年になつてもさつぱり伸びない女子学生(これは相当多数)にも接した。後者に対しては、結婚を志向したからであると言ふ解釈が成立し得るのではあるまいか。

(註三) 本論文に於てはその性質上、彼の言説の骨子のみを引用する。その間には含まれている詳論・敷衍・辛辣な諷刺・皮肉・揶揄等を含めて、随筆的に文芸的に味読せんとする場合は、全文を通読する必要があることは勿論である。

(註四) 拙稿、本論集第二号、三〇頁以下。

(註五) A. Montagu, *op. cit.*, p. 72. 邦訳、九五頁。

(註六) 「金放れ」のよい男が男らしい男として称揚されているのは、この事を裏書きすると云えまいか。

(註七) 男と女を並べて表現する場合、男を先にするのが普通であるにも拘らず、ここではそれが逆になつてゐる。更に文法学的に

云つても、命題の前段（女の側）に意味上の強調^{ヒツツンク}が置かれているものと解さるべきである。

（註八） 之を日本では「凝つては思案の外」と云う。

（註九） カント・ニーチェも、そのような人であつたと云われる。

（註十） Georg Simmel, Philosophische Kultur, 1923. 高橋訳『ジンメル恋愛論』玄海出版社、昭和二十八年、一六〇頁。

（註十一） J. S. Mill, The Subjection of Women, No. 825 of Everyman's Library, p. 302. 大久保訳『ミル婦人論』春秋社、昭和二十五年、一六七頁。

（註十二） O. Weininger, Geschlecht und Charakter, 1903. 村上訳、『性と性格』春秋社、昭和九年、二〇二頁。

（註十三） 同書 二〇四頁。

（註十四） 同書 二〇二—二〇三頁。

（註十五） 同書 二五三頁。

（註十六） コリント前書第十一章七節。藤井武氏は本節に註して次の如く云う。「神の生命の本質あらわれてキリストと成り、キリストの生命の真髄発して人と成り、人の生命の精華咲き出でて女と成る。女性^メは男性の栄光であり、キリストの栄光であり、神の三重の栄光である。……」（同氏、『聖書の結婚観』岩波書店、昭和十三年、九一頁。）尚、女を単に男の道德の容器と観たことに於て軌を一にする同氏とワイニンゲルが、共に近代フェミニズムの反対者である事には注目の要がある。

（註十七） ジンメルは、男性の過程を超二元的（überdualistisch）と呼び、女性の過程を前二元的（vordualistisch）と呼んでいる。

（註十八） 正義と云う道德に就て云えば、男に於ては、それが社会的協同生活上の道德原理であるとか、その根拠は道德法の普遍妥当性であるとか云う風に意識的に体系附けるのであるが、女に於ては唯正義感として素朴的に内在するの意。

（註十九） ここにも学的態度に於て相対主義をとると云われるジンメルの面目がある。

（註二十） 村上訳『前揚書』二九七頁。

（註二十一） 拙稿、本論集第二号 三〇頁（註四）。

（註二十二） この場合の「実」は真の意味の真実ではない。何んとなれば、ヴァイニンゲルよりの前揚引用箇所（本論三八頁）からも判る様に、語る言葉が客観的真理を伝えても主観的には常に嘘なのである。つまり真実を語るのは、或る目的達成の手段としての「真実」の有利なこと認めるが故であつて、云わば真実の為の真実ではないからである。

本節の要旨は、女性の宿命ベステルンク(天職)は種族の繁殖であると云うのであるが、先ず彼の所説に聴こう。

『若い・強壯な・美しい男性は、人類の繁殖のために力をつくすべく、自然から命ぜられたもので、種の退化を防ぐことが目的である。これは自然の牢乎たる意志であつて、この意志の表現は、婦人の激情である。(後略)』

以上の前段が肯定される為には、その背後に男と女を云わば「種と畑」と見る思想が前提されなければならないと思う。この思想は、巷間には今尙残存し、所謂「子種」は男の専有物と考えられている。然し今日では、生殖細胞は両性より出で、而かも両者同量の遺伝子を持つことは、生物学上の知識と云うよりはむしろ常識となつていゝと見るべきであり、生物学の素養もあるショーペンハウエルの口から、以上の様な俗説の立場を採用するが如き言説が出るゝとは真に不思議と云わなければならない。事実彼はその主著第二卷第四十三章を「特性の遺伝」(Erblichkeit der Eigenschaften)と題し、「性格(意志)は父より、知性は母より伝えられる」と云う大原則を掲げ、大いに論じているのである。その遺伝論は彼の形而上的意志説より来る哲学的なものであり、その中には多くの例証が挙げられていると云え、今日の実験科学的遺伝学上の所説と一致するかどうかは非常な疑問であらう。ここでは彼の遺伝学説の真理性は問題ではなく、女性を知性と云う遺伝子を持つものと見てゐる事を知れば足りるのであつて、それにも拘らず単なる「畑」と見る立場に立つが如き言説が出て来る矛盾は了解に苦しむと云う外はない。(註)かくして彼の以上の表現が許されるところならば、それは男女両性に就て同様に妥当するものであり、男性側にものみ限局するのは不当と云わねばなるまい。

次に後段の「自然の牢乎たる意志の表現は婦人の激情である」の意味は、優れた男の「子種」を宿さんとする形而上的意志は、女性に於て恐らく意識されることなく、本能の形態をとつて、即ち激情となつて現われているの意である。

然し乍ら、かかる「女の情熱」が云われ得るならば、男の情熱も同様に云われなければなるまい。^(註二) 否彼とは反対に、男の方が、受胎せしめ(Fecundate) ようとして熱心に積極的であり、女の方は、相手を弁別、選択する(discriminate) 為に受動的であるのが、自然の命令であるとする学説がある。^(註三) 何れにしても、この「情熱」を女性の側にも遡るであろうことは、今日の社会通念にも、亦社会事実にも反する事である。尤も明治時代(恐らくそれ以前にも遡るであろう)の日本に於て、異性に「惚れる」^(註四) ことが、女にとつては社会的に容認されたが、男にとつては、他に使命を有つものとして、禁忌されたと云われるが、これは飽迄当時のイデオロギーとしての当為であつて、存在の認識と見る事は出来ない。

『詮ずるところ、婦人は全くただ種族繁殖の為にのみ生存するものであり、その天分はこの点に存するのであるから、彼等は個体のためよりも、種族のために、多く生活し、彼等の心の中では、個体的事件よりも、種族に関する事件を、より真面目に考える。この事はまた婦人の全性質と全行為とに、或輕佻な色彩を与え、男子の方向とは全然異なつた方向を授ける。この方面からして、結婚生活に於て随分屢々見られる・否・殆ど常態的な不和合が発生するのである』

以上を以て本節は終るのであるが、女性だけが、種族繁殖の為にのみ生存すると云う結論は、前段の論述から到底容れないと云わなければならない。成程、女が妊娠・分娩・授乳・育児と云う風な男にない仕事を負わされているといふ感覺的な面だけから見ると、そうした断定が下され易い。然し、そうした一聯の母の仕事を社会的に可能ならしめている父の役割とか、子供の社会的成長に対する父の不断の配慮等々を想い合せるとき、遺伝子関係以外の分野に於ても、男女は結局五分五分と云わざるを得ないであらう。

然し乍ら、以上のようなショーペンハウエルによる断定の眞理性如何は姑らく措くとするも、これまでの男性支配の社会に於て、そうした見解が一般に支持されて来た歴史的事実は認めなければならない。「女は性が全部であり、男に

は別の世界がある」(註五)と云う風な広く流布している思想も、結局そうした社会的基盤からの反映と見られるであろう。斯くして、この見解も、男性支配と云う特定社会のイデオロギー即ち歴史的・相対的なものであり、絶対的本質の把握とは受取り難いのである。唯我々がここで注意を要することは、ショーペンハウエルが、結婚生活の常態的不和合の原因を、使命を異にする者の共同生活たる事に帰している点である。単に論理的・思弁的に考えるならば、使命(本質)を異にするものの間には真の結合は成立し得ない、とは必ずしも一概に断定出来ないであろう。然しショーペンハウエルは社会的事実(不和合)の説明原理として之を採用しているのである。これは、今後の婦人解放と云う茨の途に横たわる難問に対し極めて示唆するところの多い所説であると云わなければならない。

(註一) ショーペンハウエルの哲学によれば、知性(母から伝わるもの)は意志(父から伝わるもの)の道具としてそれに従属するものであるから、一応無視されて差支ないことになつて、これは矛盾しないとも云える。然し彼は『意志自由論』に於て、人間の性格として、先験的性格(意志によるもの)と経験的性格(知性の個別性によるもの)の二種を認めている。即ち、ここでは知性の独立性を暗に承認している事になるのであつて、「知性の従属性」と矛盾するとされているようである。こうした論義に深入りすることは、純粋に哲学の領域で本論文の範囲外に属する。

(註二) 激情・情熱と訳された独逸語 (Leidenschaft) は、かの『若きヴェルテルの悩み』に於ける「悩み」(Leiden)と同根語であることにも注意すべきである。

(註三) L. F. Ward, Pure Sociology, 1921, p. 325.

(註四) これは元来ロマンテックなニュアンスと與ゆかしさを有つた大和言葉なのであるが、今日では、その高貴な意味内容が失われたのみならず、露骨な表現である「変愛」にとつて替はれたことは遺憾である。

(註五) この思想の形而上学的表現及び批評は、G. Simmel, Philosophische Kultur, 1911, S. 72ff. 高橋訳『シンメル変愛論』玄海出版社、昭和二十八年、一二二—一二四頁に詳し。

本節では、女性相互間に於ける敵対關係について論じているが、先ず彼の所説に聴こう。

『男子と男子との間には、生得的にただ無頓着といふ事のみが存するけれど、婦人間には生れながらにして既に、相互の敵意がある。所謂商売敵の憎しみは、男子にあつては、其時其折の組合的關係にのみ限られてゐるが、婦人に

あつては、この憎しみが女性全体を包括している。何となれば、彼等はすべて唯一つの商売しか持たないからである。(後略)』

以上は一見成程と首肯されそうで、やはり問題がある。詳細に見ると、女が唯一の商売即ち女房稼業に入るのは大人になつてからの事であるのに、生れながらにして (von Natur) 敵意があると云うのはつじつまが合わない。「大きくなつたらお嫁に行く」と云う思想が子供の時から滲み込まれているから、とつじつまを合わせようとしても無理である。これは、種族繁殖・女房稼業を、女性に於ける本質的なものと見るショーペンハウエルの女性観から来ると解することによつて論理的に整備一貫するのである。然しそうなると又別の問題が起きる。「種族繁殖」の方は、女性特有の使命(本質)とは解し得ない所以を既に前節で説いたし、又「女房稼業」の方は、明らかに歴史的なものと云わなければならぬ。かつて母権社会が存在したことは、今日多くの学者の容認するところである。^(註一) 又稼業としての妻を忌避すること即ち婦人の経済的独立を指向するのが、今日の婦人解放運動の主流をなすものであり、現にその歩調は遅々たるものであるとも、着々その方向へ世界は進みつつある。これらの歴史的・社会的事実を、女性の本質が人為的に歪曲されたものとして強いて解することは困難であり無理である。かくして女房稼業女性本質論は承服出来ないことになるのである。

次に彼は、女の相互の敵意が或いは露骨に或いは婉曲に或いは虚飾を粧うて現われる種々相をば、例の辛辣な筆致で

巧みに描写している。これは、少くとも既往の日本婦人の姿とそっくりであると思つてもよい程一致していると思ふ。^(註三)
かくしてこれは、事実の生きた描写として読んで味うべき箇所であり、論理上の問題がないので引用を省略する。

更に彼は、女特有の歉意の原因としての同一職業即ち女房稼業を分析して次の如く説く。

『これ蓋し婦人にあつては、階級上のすべての差別は、男子に於けるよりも遙かに不定であり、より速かに変化し、または消失し得るから来るのであらう。と云うのは、男の場合は幾百もの事柄が、運命を決める要因として考えられるのに反して、女の場合は唯一の事―いかなる男に氣に入られたかということ―のみで、その運命が決まるからである。更にまた彼等の仕事が一面的であるがために、男子よりも相互に遙かに接近しているので、階層の差別だけでも、目立たたせようと欲する点からも来るのであらう。』

以上の分析の第一段は、女は「玉の輿」に乗つたり、「売れ残り」になつたり、最愛の夫に別の愛人とか「二号」とかが出来て死の苦しみをなめたり、幸福な妻が急に後家さんに落ち込んだり等々、凡て外圍の波によつてその運命が左右され、男よりも地位が極めて不安定であるから、楽しめる間に楽しみ、飾れる間に飾り、威張れる間に威張つて置く^(註四)と云う態度になることを指す^(註五)。而してその地位の不安定の原因は、女の運命が「夫の如何」と云う唯一の事だけで決定されて了い、極めて冒險的・賭博的であるからである。之に反し男の場合は、運命の決定が多元的である。例えば一度失敗しても捲土重來と云う言葉もあるように何回となく遭り直しが出来るし、又転身の可能性もあつて危険分散的であり、又自分の器量次第で運命を切り拓く事も或る程度まで可能であり、従つて地位が比較的安定していると云うのであらう。然しこれは経済力の有無で説明する、つまり既往の婦人が経済力を欠いた事から来る依存性・従屬性で説明する方がより簡明ではあるまいか。

次は第二段である。男は、政治家・実業家・学者・芸術家等々、その他一般庶民に至るまで、凡て各自個性に應じた天職を有つものとして、質的に區別され、上下の差別はつけられない。資本主義社会などでは、所得額の大小によつて

一応の差別をつける事も可能であり、又現に行われているとしても、それは男の眞価・男の勝敗を決定づける最後のな尺度では勿論あり得ない。従つて他の職業の者に対して無頓着である。(但し男でも同業者間では、そうではない事に就ては彼自身本節の初で述べている)これに反して女は、皆同業(女房稼業)であり、区別がつけられない。然し女を「世帯持ち」として見るとき、所謂有閑マダムから裏長屋の糠味噌女房まで大分差がつく。つまり男の「分け方」は区別であり、女の「分け方」は差別だと云うことになる。そこで生活水準の誇示によつて、男の同業者間の場合のように、敵愾心を満足させ、勝利感を味おうとするのである。而かも消費水準と云う数学的正確さを以て、勝敗は決定的なのである。^(註六)

要するに本節に於けるショーペンハウエルの論述は、男性支配・女房稼業と云う社会機構を前提とし、殊に資本主義社会のマンモニズムを考え合せる時、唯物論的に一貫した論理を有つ辛辣な敘述として首肯される。然し彼の場合は以上の前提をば、已に本節の冒頭で論じたように、歴史的・社会的なものと思つて、女性の本質と見ている(これは彼の女性論の随所に散見されるが、その最終の箇所が特に注目し値しよう)ので、方法論的には首肯出来ないのである。

(註一) ギルド(Gilde)と云う語が用いられている。この語は元来「同志の会合」の意であるので、この場合も経済上の同業組合だけを指すのではなく、広く結社関係(例えば政党なども)を指すものと解すべきである。

(註二) この方面の文献に就ては・A. Bebel, Die Frau und der Sozialismus, 1923, S. 12. 草間訳「婦人論」岩波文庫・昭和二十七年、上巻二九頁参照。

(註三) この事に限らず、一般に男女関係とか婦人問題に関しては、思想的方面・事實的方面共に世界共通と云つてよい程酷似しており、(年代のずれはあるとしても)国情による差が余り認められない事は、この方面の研究者にとつて大いに助かる点である。

(註四) 東洋に於ても同様であつた事は、白楽天の次の詩句に現われている。「人生婦人となる勿れ、百年の苦楽他人に依る」

(註五) 女子学生の間に見られる事象的傾向の背後にあるものも、「青春再び還らず」よりはむしろ「お嫁に行けば勝手な眞似は出采なくなるから今のうちに」であるように見受けられる。

(註六) この決定的敗北感の表現としての関西地方の言葉「甲斐性がない」は、文字的には遅れ添う甲斐がないの意であろうが、
夫れに対しその安月給を衝いて刺すところがない。

Ishizuka, Katsuo

Schopenhauer's View of Women (II)

Résumé

5

Schopenhauer says that reason does not predominate in women's mind, that is to say, their mental vision is narrow, and he attributes the cause to their early maturity. The author, however, cannot agree to attribute the cause to their early maturity. Then Schopenhauer explains women's excellent qualities of being "impromptu" and "serene" as the result of their narrow mental vision. It was, therefore, the old Germans' high practical philosophy that they, recognizing these excellent qualities, consulted with women about knotty problems.

Schopenhauer's next theory is that women are superior in their deep commiseration, which is the hypostasis of morality, but, owing to their weakness in reasoning power, inferior in justice, uprightness, and conscientiousness than men. According to him, "injustice" is often found in women, and that is all the more intensified through "the ability in cunning craft" endowed by Nature as a weapon to "Frailty." According to the author, however, women are "Frailty" not as original nature, but only as social and historical existence, and therefore "the ability in cunning craft" cannot be deemed as their original nature.

6

Schopenhauer says that the destiny of women is the reproduction of human race. The author

thinks it unreasonable to interpret it as the destiny of either of the two sexes.

7

Schopenhauer says that women are innately hostile to each other, whereas men are innately indifferent, because women have only one occupation. The author, however, does not deem this hostility characteristic to women as their original nature, because women's occupation as housewives is a periodical phenomenon in the human history.